

121127 森林に覆われた「大和葛城山」

別添の3枚の写真は、いずれも「大和葛城山」の山頂付近から、時期を変えて撮影したものです。

1枚目は9月中旬、2枚目は10月中旬、3枚目は11月中旬の撮影です。

遠く奈良盆地（大和平野）を望む雄大な景観ですが、手前に写る山の木々が徐々に色づいていく様子もわかりますね！

遠くに望む山々を含めて、その山体は樹林に覆われており、山肌の土石が露出しているところは見られません。

“山が荒れている”とか“森林が荒廃している”などと言われて久しいですが、やはり昔はもっと鬱蒼とした常緑の“原生林”が生い茂っていたのでしょうか？

多くの方は、“少なくとも今よりは自然豊かな森が広がっていたはずだ”と思っておられるのではないのでしょうか？

さて、この「大和葛城山」ですが、標高は約960m、御所市（奈良県）と千早赤阪村との境に位置しています。

5月頃に満開を迎える山頂付近の「ツツジ」で有名な山です。

なお、「葛城山」の名称は、かつては金剛山を含む山系の総称として用いられていたようですが、果たして、昔（明治時代以前？）はここに“原生林”が広がっていたのでしょうか？

「古事記」には次のような記述があります。

『雄略天皇が460年頃に葛城山に行幸したとき、周囲の山は既に樹木が見られない状況だった。』

さらに「飛鳥時代」、藤原宮造営のために大径木が必要でしたが、大和国など当時の我が国の中心地域周辺の山には、既に（伐採された後で）見当たらず、滋賀県の田上山（たなかみやま）など、近隣諸国の山から調達せねばならない状況だったそうです。

つまり、森林荒廃は最近の出来事では無く、古く飛鳥時代の頃から始まっていたことで、その後も貴重な資源として森林伐採が続き、森林荒廃のピークは明治時代ではなかったかと言われています。

そして、当時の豪雨災害の多発により、治水三法（河川法・砂防法・森林法）が成立し、ようやく森林再生が進み始めたのですが、近代化として進められた国土開発の影響や長い戦時体制下における木材需要の増大等により、再び森林は荒廃していったのです…

以上のことを考えると、別添の写真のように山々に“豊かな森”が広がっている風景は、“昔ながら”のものではなく、“ここ千数百年では最高の状況”だと言えるのかも知れないのです…

では、現在のように、ここまで森林が回復した原動力は何だったのでしょうか？

大きな理由として考えられるのは「燃料革命」や「肥料革命」、そして「外材輸入の自由化」の3つではないかと言われています。

つまり、用がなくなったために見向きもされなくなり、放置されたことで森林資源が回復してきた、ということなのです。

ただし、確かに見かけとしての「量」は充実しているのですが、放置された森林は必ずしも健全に生育するとは限らず、「質」としては問題を抱え、防災上、安心できない“放置林”が増えてきているのも事実です。

遠くから眺めると“豊か”に見える森林も…

林内に入れば、

間伐されずに林内が真っ暗になったスギ・ヒノキ林、
燃料としての伐採がなくなり大木化したクヌギ・コナラ林（ナラ枯れ病の蔓延）、
管理されずに隣接地へ拡大する竹林…、

などの問題を抱えているところも多く、

これからは“健全な森づくり”に取り組んでいく必要がありますね。





